



## 時事寸評⑩

### 耐震強度偽装事件と自己責任

土井 文博

昨年世間を騒がせた大きな事件の一つに、マンションなどの耐震強度偽装事件がある。この事件はまだ解決したわけではなく、同様の事件がさらなる広がりを見せつつあるが、国会での答弁など、マスメディアに映し出される事件の当事者達の姿を見て、どう思われたらろうか。今回は、社会学という視点から、この問題を考えてみたい。

この事件は、売り主、建設会社、建築士、審査機関等が、いわば結託し、人命よりも金儲けや仕事をもらうこと、あるいはとにかく仕事を早くさばくことを優先させた結果起こったものとして報じられている。この事件のニュースを聞いて、日本の安全神話がついに崩壊したと感じた人も多いだろう。昨年4月に起きたJR西日本の列車脱線事故といい、幼い子どもを襲う事件といい、私たちの毎日の生活にとって本当に身近なところの安全が脅かされている。なぜこうなってしまったのか、なぜこんな事が起こるのか。その問いに、エーリッヒ・フロムという学者が一つの答えを出している。

彼は『自由からの逃走』という本の中で、第2次世界大戦において人々がナチズムに熱狂していった理由を解き明かしている。その

理由とは、本のタイトルそのもの、つまり、「自由」から人々が逃走したことによるというものであった。「自由」からなぜ逃走する必要があるのか。「自由」なんだからこんな楽しいことはないじゃないかと思う人も多いかもしれない。それはおそらく、「自由」という言葉の意味するものが、多くの日本人にとって誤解されているからであろう。日本人にとって「自由」という言葉のイメージは、「何事にも縛られることなく、自分の好きなことを好きなように、好きなだけ行えること」といったものだろう。しかし、このイメージには、大きな点が欠落している。それは、「責任」である。本来の「自由」という言葉の意味を的確に表すには、先ほどの文の最初に、「自分の責任の限りにおいて」という表現を付け加える必要があるだろう。何の責任も取らなくていい、あるいは責任を何も取ろうとしない自由というものは存在せず、それはやりたい放題の「放縦」にすぎない。このことは、サマーヒルスクールの創設者として自由の教育を実践したA. S. ニールの指摘でもある。この「自由」と「放縦」の混同が、「自由」の持つ重みをしっかり認識できなくしてしまう。つまり、本来「自由」とは責任を伴うものであり、ある意味「重荷」なのである。当時のドイツ国民における「自由からの逃走」は、母国が第1次大戦の敗戦国として多額の賠償金を課せられ、国民の生活を支える社会保障もままならなかったため、多く

の人々が明日の食べ物さえ不自由する状態に陥った事に起因する。「自由競争」の名の下、大資本が幅を利かし、資金力のない者は生活を追われた。実際、自殺者も溢れたというが、生きることを望む者にとって、残された道は「自由」の譲渡しかない。小さな商店主に代表されるような下層中産階級と呼ばれる人々がナチスを熱狂的に支持したというのも、うなずけるであろう。彼らにとって、その自由という重荷を引き受け、自分たちの生活の保証人となってくれたヒトラーという存在は、救いの神に近かったことだろう。実際、当時のドイツ国民にとって、ヒトラーは国の未来を明るく照らす国民的英雄に他ならなかった。アウトバーン建設など公共事業をどんどん打ち、そこに3人に1人とも言われた失業者を投入する。こうしたことによって、ドイツはめざましい経済発展を成し遂げた。

自分たちの生活が保証されることは有り難い。しかしそれには、「自由の譲渡」が条件とされた。つまりそれは、自分で善悪を判断することさえやめ、上の者に言われるがままに、ただ従うということの意味する。これがフロムの言う「権威主義的パーソナリティ」であり、「自分が責任を負うことはないのだから、言われたことをただやっていたらいい」といった態度を生むのである。

現在、私たちは様々な自由を行使できる社会に生きている。たとえば、車を運転する自由がある。しかし、車は時として人を傷つけ

る凶器にもなりうる。人を傷つけておいてその場を立ち去る「ひき逃げ」という行為は、自由だけを行使し、責任を取ろうとしない者の行いであり、その自由は奪われてしかるべきであろう。また、私たちは社会において様々な職業にも従事している。一定の範囲ではあるが、自分の役割として、そこで行使できる自由を持っている。その自由に対しては責任を持つという覚悟が常に必要であろう。たとえそれが上司の命令で、「私がすべて責任を負う」と言われても、実際に手を貸した自分の責任が免れるわけではない。「組織」として動いていると、個々人の責任の範囲が不明確で、いつしか「組織全体の責任」あるいは「自分以外の誰かの責任」と勝手に思いがちになるが、「自分が行った行為」の範囲というものは明確に存在する。その行為に対して、「させられただけだ」といった言い訳は、子どもでもなければ通用しないだろう。

今回の事件に戻れば、人命に関わることと知りながら、金銭的な欲望から耐震データをごまかした上、当事者が互いに責任をなすりつけ合うその姿は、権威主義的パーソナリティそのもののように私には映った。現代社会においても、このような権威主義的パーソナリティに陥るプレッシャーは多々存在する。だからこそ、「責任の取れないことはしない」といった勇気も必要であろう。

(本研究所研究員 社会学)